平成 27 年 3 月 7 日

平成 26 年度卒業証書 修了証書・学位記授与式　学長式辞

長崎国際大学　理事長・学長　安部　直樹

“生みたての卵の温みほどの春”。北国からはまだまだ大雪の便りも届いておりますが、キャンパスの至るところに、梅、辛夷（こぶし）、蕗の薹、土筆の蕾が膨らみ、春の力強い足音が感じ取られるようになりました。

本日、第 12 回卒業式を挙行しましたところ、ご多忙な中、朝長則男佐世保市長を始め、多数のご来賓の皆様にご臨席を賜り、ありがとうございました。また、保護者、ご家族の皆様、在学期間中は、陰になり、日なたになり、お見守り頂き、ありがとうございました。ご心配、ご心労の程一入でありましただけに、本日、卒業を迎えられましたこと、心よりのお喜びを申し上げます。

今回の 323 名の卒業生、この中にはアジアからの 45 名の留学生と 5 名の大学院生が含まれています。殊に留学生の皆さんは母国を離れ、昨今の難しい国際情勢の中で一所懸命に勉学に励まれました。まずもってその努力に心より敬意を表します。

さて、旅立ちを迎えた皆さん、大学を去ろうとする今、再度大学に来た意味を考え、大学で学んだこと、大学を卒業していく人生の在り方を考えてみましょう。皆さんが生きていく社会は、過去が時代を作り、現代は未来への扉となっていきます。

昭和 20 年、第二次世界大戦が終わり、わが国の価値観は一変しました。その後 20 年間、幸福とは豊かになることだと多くの日本人が信じ、一所懸命働きました。日本が一番貧しく、動乱の最中に、本学園は誕生し、来年度 70 周年を迎えます。まさに時代の要請によって生まれ、そしてその時代の人々の願いと思いを受けて成長し、今日も総合学園として成長を続けています。同様に日本も豊かな労働人口と欧米と比較しての低賃金で、奇跡といわれる経済成長を遂げました。日本に元気が戻り、未来はきっと良くなるという希望が国中に満ちていました。良くも悪くも価値観は豊かさへの追及で一致していました。

しかし、すべて順風満帆というわけではありません。1991 年バブルが弾け、2008 年リーマンショック、さらには 1995 年の阪神淡路大震災、2011 年の東日本大震災と立て続けに不幸に見舞われました。賃金も物価も値下がりのデフレーションが続き、日本は貧しくなっていきました。一方で幸福とはものの豊かさだけではない、人との触れ合い、ボランテ

ィアや支え合う喜び、長寿社会での健康のありがたさ、癒し、おもてなし、共生の思いが生まれ、また、グローバル社会の到来と共に多様化したものの考えがなされるようになりました。

大学はまさに、その多様性の中にありました。専門教育、教養教育の学びの中での先生方や地域、実習先の方々との出会いが皆さんの視野を広げ、多角的な思考を実現し、心を豊かにしてきたはずです。日本は少しだけ貧しくなりました。格差社会、非正規雇用、限界集落などの心配はありますが、日本国民は元気、日本国民は明るいということを忘れなければ日本の未来、皆さんが歩んでいく社会は決して悲観的なものではありません。文字通り、明るく、元気な日本を創るために、皆さんの前向きな力が必要なのです。

NHK の大河ドラマ「花燃ゆ」では、幕末の思想家、吉田松陰の若き日の姿が描かれています。松陰は松下村塾を開き、そこで明治維新を作り上げた高杉晋作、伊藤博文、山縣有朋等を輩出しました。松陰は長州藩を脱藩したり、アメリカのペリー艦隊に乗り込み密航を企てたり、時の幕府を痛烈に批判、30 歳の若さで斬首刑となり短い人生を終えます。

松陰は、幕末の志士、高杉晋作に語りかけます。「君の志は何ですか。僕はこの国を良くすることです。志があれば生きることが楽しい。やる気が尽きることがない。志を立てることは全ての源です。志は誰も与えてはくれません。君自身が見つけて、それを掲げるしかない。君は何を志しますか…」と。

皆さんの大学に入学した時の志、卒業する今の志は何でしょうか。真剣に志に立ち向かってください。全身全霊で志を立てようではありませんか。志を立てている人は、事は半ば達成されたといっても良いのです。皆さんのこれまでの人生において幾度か志を立て、幾度か挫折をしたこともあったでしょう。しかし、道がない、道が開けないということは、その志が弱かった、意欲に欠けるところがあったのではないでしょうか。

大切なことは、他人に頼り、他人をアテにする心を払拭した自らの志であります。自らの態度であります。志を持って一瞬一瞬を大事に生きる。その積み重ねが一生につながります。松陰は命をかけて開国という志を立てて、果てました。この烈々たる勇気を忘れないでください。皆さんの幸福と充実した人生を心から祈り、お別れの言葉といたします。さようなら。